

Close-up Interview (12月号 表紙の顔)

寺下 智香

CHIKA TERASHITA

「デビューからの6年間は 順調すぎるくらいにこられた」

今月の表紙に登場いただいたのは、新世代の旗手から真の主力へと、成長を続ける寺下智香プロ。今年誕生した「JPBA☆SSSカップ」の翌日に取材をお願いしていたが、そのSSSカップを予選からぶっちぎりの完勝で6勝目を挙げ、自ら花を添えてくれた。

「部活のバスケットよりも ボウリングにはまりました」

ボウラーでもある父親に連れられて、幼いころからボウリングは身近な存在だったが、マイボールを作って本格的に始めたのは中学生のとき。

「クラブ活動ではバスケットボールをやっている、部活が終わってからボウリング場に行って練習をしたり、リーグを投げる毎日でした」

持ち前の運動神経もあって、バスケットボールでもスターティングメンバーで活躍したが、高校ではきっぱりとボウリング1本にしぼり込んだ。

「ボウリングの方が面白かつ

たですね。妹もマイボールを作ったけど、はまったのは私だけでした。だから昨日のSSSカップで、斎藤祐哉さんと塚哉さんの、兄弟での優勝決定戦がうらやましかったです(笑)」

JBCに入会して、2年生のときに初めて出場した全日本高校選手権で、初のパーフェクトを達成、5位入賞を果たした。また同じ年の国体にも出場し、個人、団体ともに5位に入賞した。

「結果が出るようになって、ますます真剣に取り組むようになり、漠然とした夢だったプロの世界が、徐々に現実的な目標となっていきました。高校を卒業してすぐにプロテストを受けたかったけど、受験料などをためるために、センターでアルバイトをしながら練習を続け、1年後の受験になりました」

経費もかかる北海道からの受験ということで、1発合格を誓っての挑戦だったが、見事にトップ合格を果たし、47期のライセンスを手にした。そしてそれからわずか2カ月半後の新人戦で、初タイトルを獲得する。

「ベテランたちが出ていなくて、唯一チャンスがありそうなタイトルかなと思っていましたが、まさか1年目で取れるとは思っていませんでした」と振り返るが、2年目はさらに勢いを増して、優勝賞金400万円のレギュラートーナメント・ラウンドワンカップで優

勝、ランキングも6位へと躍進した。

「準決勝は12位で、ぎりぎりラウンドロビンに残りました。ボールがすごく合っていたなという印象があって、下からどんどん上がっていった。こういうこともあるんだと勉強になりました」と、3位でTV決勝に残り、姫路麗や阿部聖水(現・堂元美佐)を下しての堂々の優勝だった。

「緊張はしていたけど、当時はまだタイトルが欲しいという欲があまりなかったせいか、思ったよりも落ち着いて投げられました。賞金でブラダのバッグを買いました(笑)」

翌年は優勝こそなかったものの、ほとんどの試合で決勝(ラウンドロビン等)に進出し、ランキングも3位につけた。

「安定はしていたけど、ラウンドロビンに残ってもそこまで、優勝争いには加われなかった。自分に何が足りないんだろうと悩んだ年でもありました。だから翌年のMKチャリティカップの優勝はうれしくて、今まででいちばん大泣きました」

「リストタイが禁止の来季は 不安だけど楽しみも…」

今年の2勝を加え、デビューから6年目で通算タイトルも6個となった。

「プロ入り前は勝手にいろんな夢を描いていましたが、実際に入ってみて厳しい世界だなと分かりました。そのなかでは、すごく順調にこられたなと思います。なにより男手ひとつで妹と二人を育ててもらったお父さんが、私の活躍を喜んでくれていた顔を見ると、本当に頑張ってきてよかったなと思います」

近年の女子プロボウリングは、姫路麗・松永裕美VS若手という構図になっている。その若手

の旗手として2強に挑んできた。

「お二人は目標であり、越えたい壁ですね。でもまだまだ足りない部分が多い。今年はひそかにポイントランキングトップを狙っていましたが…、でもSSSカップでアベレージではトップに立てたので、1冠を取れるようにあと2試合頑張ります」

成績が出るとともに、自分のことだけを考えていればよかった立場から、立ち位置も大きく変わってきた。「やっぱり見られていると思うので、常に堂々としていられるようにとは心がけています」

またあらゆるスポーツが国際化する時代にあって、国内だけでなく、海外にも目を向けるようになってきた。

「3年前に板倉奈智美プロ、内藤真裕美プロと一緒にアメリカに行って、PWBAのトーナメント2試合に出場しました。そのときは手も足も出ない感じで、自信をなくして帰ってきました(苦笑)。でも私が挑戦することで、後輩プロへの道が作ればいいなという気持ちもあるので、これからも挑戦を続けたいと思います。本当は今年も行きかけたけど、まずは素手でしっかり投げられるようになることが先決です」

来年1月には、寺下プロにとっても大きな影響がありそうな、リストタイの使用禁止というルールの変更が待っている。

「中1の誕生日にプレゼントでメカテクターをもらって以来、ずっと頼ってきたので、素手になる来年が怖いです(苦笑)」と、正直に不安を吐露するが、一方でしっかりと前を見据えている。



▲素手になる2020年は、どんなボウリングを見せてくれるだろうか

「なにより慣れが大事だと思うので、1月は仕事を入れないでひたすら投げ込みをするつもりです。メカをつけていたから勝てたといわれたくないし、外しても結果を出します。素手にすることで、新しい発見もあるんじゃないかという、自分への期待もあります」

(取材協力:東京ポートボウル)

寺下プロと一緒に投げよう! 近日開催のチャレンジマッチ

●12月15日
埼玉・南平グランドボウル

●12月17日
ラウンドワンLIVEチャレンジ
北海道・札幌すすきの店(配信店舗)



てらした・ちか/1994年8月16日、北海道生まれ。157cm。右投げ。血液型O。2014年プロ入り(47期/ライセンスNo.507)。スガイティノス/㈱サンブリッジ所属。タイトル6。



▲2017年のMKチャリティ優勝で号泣。「レギュラーで2勝して本物といわれていたの、最も印象に残るタイトル」